論文の和文要旨

論文題目	カンボジア仏教僧チュオン・ナートの思想と行業 ―人と社会に裨益する精神の軌跡―
氏　名	調　　邦　行

本論文は、人と社会への裨益の精神に貫かれたカンボジア仏教僧チュオン・ナート（Chuon Nat 1883-1969）の思想と行業を近現代カンボジア仏教史の中で捉え、彼の基本的仏教思想を明らかにすると同時に、その思想とカンボジア仏教の近代化との関係を考察することを目的とする。

チュオン・ナートは国語辞編纂者として高名であるが、むしろカンボジア仏教を興隆に導いたことがより高く評価されてもよい。先行研究の中心は仏教実践改革や辞典編纂など彼が関わった一部の行跡に関する論述が中心であるが、現代につながるカンボジア仏教に対する彼の貢献やその意義を知るためには生涯にわたる思想や行業を総合的、体系的にとらえる必要がある。また、世俗的事業としての国語辞典編纂に彼が熱意を燃やし続けた根拠を考察することも彼の思想を知る上で欠かすことができない。更に、彼の思想と行業がカンボジア仏教に及ぼした影響はその近代化を考察する上で重要である。

以上を踏まえ、本論文は次の四つの視点を持つ。即ち、彼の思想と行業の近現代カンボジア仏教史の中での位置づけ、国語辞典編纂の根拠や辞典が持つ意義の解釈、彼の思想や行業とカンボジア仏教の近代化との関係、裨益の精神の仏教思想的解釈に関するする視点である。

一つ目の歴史的視点として、カンボジア仏教復興本格化の起点といえるパーリ語学校の開設はチュオン・ナートの思想に関係する重要な出来事である。1909 年の同校設立は必ずしもフランス保護国当局の政治的思惑によるものではなく、ニル・ティアン（Nil Diang 1824-1913）やロアト・タオン（Roat Thaong 1862-1927）などモハーニカーイ派高僧の信念と努力によるものであった。彼らの弟子であったチュオン・ナートは 1912 年、

当時出家者のみが理解できたパーリ語仏典の教説を説くことによって庶民の現実苦からの脱却に裨益することを決意した。モハーニカーイ派の中で新仏法派といわれた彼ら数人の比丘は、まずウンナーロム寺での仏教実践改革の取り組みを開始した。また、彼はパーリ語学校の教壇にも立って志の高い僧の輩出や三蔵翻訳事業の基盤作りに貢献した。

次に、チュオン・ナートなどは困窮する庶民への伝道に傾注し始めた。折しもカンボジアに赴任したフランス人東洋学者シュザンヌ・カルプレス（Suzanne Karpelès 1890-1968）は彼らの理念に共鳴し、1925 年に王立図書館、1930 年に仏教研究所を設立して新仏法派の伝道を支援した。チュオン・ナートは彼女の思想に強い影響を受けた。仏教興隆の流れは彼らと仏教を社会倫理の支柱にすべく努力する彼女との協働によって作られたものであり、フランス保護国当局の支援を強調することは妥当ではない。

上座仏教は一般的に自己の悟りを目指す出家者と現世利益や来世の生天を願う在俗者による二元的体質の宗教とされ、トアンマユット派やモハーニカーイ派旧仏法派などの宗派はこの伝統を守っていた。しかし、1927 年、チュオン・ナートはカンボジアで初めて「在家戒律概説」を著し、彼の盟友である比丘たちも翻訳仏典や解説書を出版してクメール語で経典内容を理解するよう在俗者に説いた。このような法施の積極化は二元的体質であった従来のカンボジア仏教に質的変容を促した。

反フランス感情が高まる第二次世界大戦下、チュオン―ナートは中道の姿勢を保つ一方で、サンガの社会的役割についての認識を強めた。彼は国歌の作詞を通して視座を高め、一方でサンガの社会意識を強めさせた。社会とのつながりを重視し、仏典の理解に重点を置く仏教は人々の信仰を集めていった。彼は自治権獲得後の 1947 年憲法における仏教の国教条文化に尽力し、モハーニカーイ派管長となって国教の体現に意を注いだ。国家情勢に暗雲が立ち込めた晩年、サンガの和合と国民の慈悲や団結を願ったが情勢は悪化し、彼は国家の危機を憂えつつ 1969 年に入滅した。

ポル・ポト政権の崩壊後、秩序回復や生活空間の再建への希求とカンボジア仏教の凝縮力によって仏教の再復興が進んだという指摘がある。しかし、それよりも人々が求めたのは死者を供養し疲れ果てた心を癒す慈悲の仏教であった。苦しみから救済する仏教信仰の種を人々の心に蒔き続けたのはチュオン・ナートである。仏教再復興の原動力は仏教が持つ普遍性、彼の裨益の精神、大衆の厚い信仰心が織り合わさって生み出されたものである。このように、彼は近代から現代につながるカンボジア仏教において、復興、実践改革、質的変容、国教化を牽引し、仏教再復興の精神をも支えるなど通時的歴史の中で常に重要な役割を果たしてきた僧であった。

二つ目の視点は、チュオン・ナートが国語辞典編纂に生涯関わり続けた根拠や辞典が持

つ意義に関するものである。辞典編纂はクメール語正書法の統一を目的として始まった。聖典語パーリ語とクメール語の関係を強めようとしていた彼は、辞典見出し語に主としてパーリ語からの借用語を増やし、仏教術語を多く取り入れると同時にクメール語の情報発信力を高めた。また、彼は『クメール語辞典』を自らの思想の集大成と位置付けた。出家者である彼が国語辞典編纂という世俗的大事業を成し遂げた情熱の源には人と社会に裨益しようとする精神が横たわっていた。この辞典は語義を定義する国語辞典でありながら、彼の思想の結晶としての詩集・語録であると同時に、仏教を基底に持つカンボジアならではの文化を反映した文献であるといえる。

視点の三つ目は、チュオン・ナートの思想や行業とカンボジア仏教の近代化との関係についてである。出家者と在俗者の二元的体質は歴史的にパーリ語仏典の教説を出家者に独占させ、在俗者には布施と五戒の遵守が説かれるのみであった。そのため、上座仏教は二重構造の宗教ともいわれるが、カンボジア仏教においてはチュオン・ナートなどがその構造を打破した。彼らはパーリ語仏典の翻訳を通して聖典の在俗化を進め、クメール語で教理を説くことによってカンボジア人の宗教的目覚めを促した。この二元的体質の変容、即ち上座仏教の質的変容がカンボジア仏教近代化の要諦である。

出家主義という前提は温存しつつ、出家者と在俗者の意識と行動の変化が生み出した上座仏教の質的変容は、それぞれの様相は異なるものの、ほぼ同時代のスリランカ、ミャンマー、タイでも起きている。カリスマ的僧や在俗信徒によって主導されたこれらの国の質的変容はキリスト教への対抗を起点として、在俗者による仏教教理の理解と瞑想の在俗化を進めた。出家者同様の「定」の修学によって在俗者が悟りを目指すことを可能にしたことは、両者の境界を不明確にし、「世間の出家者」の広がりにつながった。

一方、カンボジア仏教の質的変容の基点にはキリスト教への対抗ではなく、大衆の貧困など現実的な苦への憐みがあった。それはチュオン・ナートなど新仏法派僧とシュザンヌ・カルプレスとの協働や高等パーリ語学校の僧侶教育などを通して組織的に展開された。また、教理面においては、瞑想による悟りの追求は重視せず、自己努力によって現実苦からの脱却を助ける「戒」に重点が置かれた。人間の倫理規範を説き、社会規範を重んじるカンボジア仏教は、人と社会に幸福をもたらす宗教として庶民の生活の中に浸透していった。このようにしてカンボジア国民の心の中に醸成されていった信仰が国教として仏教を戴く基盤になりえたとも考えられる。

四つ目の視点は、チュオン・ナートの裨益の精神の仏教思想的解釈に関するものである。人と社会に裨益する彼の精神の根底には「業と果報」を重視する思想があった。彼は業報としての苦しみからの解放は、放逸に陥らず地道な努力によって実現できると人々

を励まし、涅槃を目指すよりも自己努力による現実苦からの脱却を説いた。

彼が発揮した裨益の精神は仏教思想としての利他である。利他のおこないとして他者に教えを説いて導く法施は上座仏教では重要な徳目ではなく、従来の出家者は自己の悟りのための修行に専念してきた。しかし、チュオン・ナートは伝統に拘泥することなく、庶民に教説を説いて、止悪修善を勧め地道な努力を促す法施に力を入れてきた。彼の利他の精神は大乗仏教の菩薩道である六波羅密に通じ、菩薩戒の実践につながっていた。彼は大乗仏典を深く学び大乗菩薩道を意識して実践しようとしたものではなかったが、上座仏教経典から利他の教説を汲み取り、自らの徳目として行業に生かした。一般的に上座仏教は自利、大乗仏教は利他、と区分されがちであったが、このような画一的かつ一面的な見方は今日では成り立たない。

チュオン・ナートの晩年、国内情勢が悪化する中で、彼は『クメール語辞典』の改訂に傾注し、ラジオに出演して国民に語りかけ続けた。それらのおこないは、国民の幸福と社会の発展に裨益するために自らのなすべきことをなすという彼の強い信念に基づくものである。その信念がカンボジア仏教に質的変容を促し、民族の宗教といわれるまでに仏教の普遍性を高めることにつながった。

以上のことから次のことがいえる。チュオン・ナートはカンボジア仏教の歴史の上に大きな足跡を残してきた。彼が貫いた裨益の精神は大乗仏教の要諦である利他の実践思想であり、その思想の広がりがカンボジア仏教の二元的体質に質的変容をもたらした。この質的変容こそカンボジア仏教固有の近代化の特性である。同時に、この変容は自利が第一とされてきた上座仏教の概念を打破し、カンボジア仏教に利他の思想を吹き込んだ。そのような意味において、彼は文化的功労者や仏教実践改革者というに止まらず、従来のカンボジア仏教のあり方に根本的変化を促した仏教の変革者である。仏教再復興の原動力につながる信仰の種を人々の心に蒔き続けた彼の思想の価値は今日なお衰えず、行業の意義も失われていない。